
我々が倶楽部へようこそ

柊 咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我らが倶楽部へようこそ

【Nコード】

N4978F

【作者名】

柊 咲夜

【あらすじ】

それはかがみとみゆき、二人だけの秘密倶楽部。めくるめく架空戦記の世界にようこそ。

第1話：孤高の完璧超人

この崩れかけた世界の片隅で
人知れず朽ち果てようとしていた私の心。

『我等が倶楽部へようこそ』
高良みゆきの優しい架空戦記入
門

夢とは何でしょうか？

たとえば脳の電気信号のなせる技とか、あるいは記憶の整理とか、
諸説ありますね。

そもそも一口で夢といっても、いろいろな種類があります。

正夢とか予知夢とか、あるいは悪夢とか。

では私が繰り返し見るあの夢とは、いったいなんなのでしょう。

2

わからない、でも、わかっているのです。

それは遠い昔の、幼いころの自分の姿。

もう二度と思い出したくない、とても苦い記憶なのでした。

「にげたぞっ」

情け容赦なく照りつける八月の日差し。

抜けるような群青色の空に浮かぶ、まるで綿菓子を思わせる真っ
白い断雲。

「あっちだっ」

陽炎でゆらめく、かなたの色鮮やかな新緑の林。
整然と並ぶキャベツたち。

「おっかけるっ！」

心とむ用水路のせせらぎ。

手足にまとわりつく生暖かい風。

むせ返るような土ぼこりと自分の汗の匂い。

そして私たちが駆け抜けていくのは、深いわだちの跡が残る、凸凹だらけのあぜ道。

「みゆきちゃん、がんばって！」

自分の名を呼ばれ、思わず振り返りそうになりました。

でもそんなことをしたら最後、あっという間にお目当ての物を見失ってしまいます。

しかたがないので「うんっ」と返事だけして、手にした捕虫網をぐいっつと握り直しました。

私たちが次の獲物と見定めたのは、一匹のとてつもなく美しいトンボ。

それは幼い自分の手のひらよりも大きくて、キラキラと羽が銀色に輝いていて、

クリクリとよく動く黄緑色の頭で私のことを見つめていたのです。是が非でもあれを自分のものになりたい。そう思いました。

「えいっ」

狭い用水路を一息で飛び越え。

広大なキャベツ畑を猛然と踏み荒らし。

いつの間にか目前には林が迫ってきていました。

ですがその頃の私は、まだ『諦める』という言葉が知らなかったのです。

「はあ、はあ、はあっ」

喉が酸素を求めて震えます。

心臓が早鐘のように鳴り響きます。

身体中から滝のように汗が吹き出します。

でもそんな私のことをまるであざ笑うかのように、トンボは軽やかに宙を舞っていて。

残念ですがこのままでは、とても追いつけそうにありません。

それでも絶対逃がしたくない。その一心で、私は無我夢中で捕虫網を振り回しました。

届け。

もしかすると何か超自然的な存在が、私のことを哀れんでくれたのかも知れません。

ふと気がつくと、網には件のトンボがしっかりと捕らえられていたのです。

「やったあ！」

嬉々として網に手を入れ、慎重にトンボを取り出すと、私はみなさんにもよく見えるように高々と獲物を掲げました。

「ほらみて、つかまえたよ。こーんなにおおきなトンボ！」

ところが、期待した反応はどこからもありません。

「あれ」

不思議に思い周りを見回すと、先ほどまで一緒にトンボを追いかけていたはずの友達や親戚の子ども達が、奇妙なことに誰一人として見当たらなかったのです。

「ねえみんな どこ？」

そう、私は見慣れぬ景色の中にただひとり、ポツンと取り残されていたのでした。

それまで生暖かかったはずの風が、なぜか急に嘘寒いものに感じられたことを覚えています。

そして。

いつものように、ここで目が覚めました。

八畳ほどの私の寝室は、何事もなく暗闇と静寂に包まれています。

ベッドから半身を起こし、枕もとの時計を手にとると、まだ午前二時をほんの少し回ったばかり。ひとりで眠るのがあたりまえになった昨今ですが、あの夢を見てしまった後だけは、ほんの少しだけ人恋しくなりますね。

でもまさか高校生にもなって、別室で眠りかけているはずの母の懐に潜りこむ、というわけにもいきませんし。しかたがないので、朝になるまで膝を抱えて丸くなることにしました。

本を読むことが何よりも好き。

ネットで新たな知識の欠片を見つけることが無上の喜び。

探せば探すほど、そして識れば識るほど、知の世界は奥が深くて底が知れない。

それほどまでにこの世界は、新たな発見に満ちている。

とても、とてもワクワクします。

この喜びを、誰かと分かち合いたい。
誰も見たことのない、この私だけが見ている光景を共有したい。
そう願っていたこともありました。

けれど。

何かに夢中になるといつの間にか周りが見えなくなつて。
ふと振り返るとそこには誰もいなくなつて。
いつもひとりっきりで取り残されている。

私が丹精込めて守り育てた、この秘密の花園を共に眺めてくれる
人など、どこにもいない。

あれからずいぶんと身体も成長した。

比較にならないほどの知識も身につけた。

なのにあの頃から、何ひとつ状況は変わっていない気がします。

どこでも、ひとりぼっち。

いつも、ひとりぼっち。

もう、慣れた。

もう、諦めた。

嘘つき。

第2話：心躍る誤算

翌朝。

私が眠い目をこすりながら、ダイニングでいつもより少ない目の朝食を取っていると、母が心配そうな表情を浮かべながら話しかけてきました。

「みゆき、なんだか顔色がよくないわよ。ひよっとして風邪でも引いた？」

「いえ、決してそういうわけでは。昨日はあまりよく眠れなかったので、おそらくそのせいではないかと」

「そうなの。じゃあ、お母さんがとっておきの飲み物を用意してあげる」

「いえそんな、どうぞお気遣いなく」

「いいからいいから。ちょっと待っててね」

しばらくして戻ってきた彼女から、私は小さなマグカップを受け取りました。外見は、まあ普通です。それに香りも特に問題なさそう。試しに一口含んでみます。

なんとも形容しがたい、摩訶不思議な味が口の中いっぱいに広がりました。

「コーヒーのような、牛乳のような、でもとても甘ったるくて。どうやら通常の三倍は砂糖が入っているようです。」

「あの、これは……」

「アーモンド・オレ。おいしいでしょ」

「は、はあ」

ニコニコと微笑んでいる母の顔を見てみると、私はそれ以上何も

言えなくなってしまうのです。でもだからといって、このままでは私の味覚神経がどうにかなりそうですね。なんとか口実を見つけてこの場を切り抜けないと。

「あ、そろそろ用意をしないと遅刻してしまいますね。では、歯を磨いてまいります」

「あらそうなの。でもアーモンド・オレ、まだ残ってるわよ」

あつう、どこまでも自由な人なのですね、この人は。母に気取られないよう、ひそかに私は涙をぬぐうのでした。

以前よりは学校もずいぶんと楽しい場所になりました。仲のいいお友達もできましたし。でも気を引き締めていないと、ついつい暴走してしまうわけで。

「レイテ沖海戦とは、昭和十九年十月二三日から二五日にかけてフィリピン及びフィリピン周辺海域で発生した、日本海軍と米海軍との間で交わされた一連の海戦の総称です。別名、比島沖海戦とも呼ばれるようですね」

私の目の前には、ふたりのお友達がいらっしやいます。

泉こなたさんは瑠璃色の長い髪と、常にどこか遠くを眺めているかのような翠色の瞳がとても印象的な女の子。とにかく話題が豊富で、おもしろいお話もたくさんご存知ですね。ただ残念なことに、私にはよくわからない概念も含まれているのですけど。たとえば『萌え』とか。

柊つかささんは董色のショートカットにリボンがよく似合う、とても可愛らしい印象を振りまく女の子です。泉さんには時々『天然』

とからかわれることもあります。そのふわふわとした人当たりのよさが実は最大の魅力なのではないか、と思いますね。

「直接的にはシブヤン海海戦、スリガオ海峡海戦、エンガノ岬沖海戦、サマール沖海戦の四つの海戦からなります」

おふたりは何も言わず、黙って私の話に耳を傾けてくれています。それをいいことに、私は少しばかりヒートアップしてしまいました。海戦の背景、推移、評価など、私はただ思いつくままに述べ立てていきます。

「というわけで、昭和十九年十月二五日をもって日本海軍の組織的抵抗は実質的に終焉した、と結論していいのではないのでしょうか」

そう言い終えてからようやく、しまったと思いました。空気も読めないまま勢いにまかせ、ただ自分の知識をひけらかしてしまふ。いつもこうやって周りを白けさせてしまふのでしょうか。いい加減、少しは私も学習しないといけない。

しよせん、私はひとりぼっちですか。

そう思って私がつくりと肩を落とした、まさにその時のことでした。

「まあそれはもっともだと思っただけど、みゆき？」

ふふっ、といたずらな笑顔を浮かべながら現われたのは、つややかな董色の長い髪を後ろで二つにまとめた、ちよっぴり気の強そうな少女でした。彼女は隣のクラスの学級委員で、柊つかささんの双子のお姉さん。ファーストネームはかがみ。ええ、柊かがみさん。

「はい、何でしょうか」

私は彼女の目を真正面から見据えると、次の言葉を待ちます。

「もしあの時、サマール島沖で第一遊撃部隊が引き返さなかったとしたら、戦いの行方はどうなっていたと思う？」

「え？」

予想外の問いかけに、私は戸惑いを隠し切れませんでした。

まったく、なんということでしょう。私の話をきちんと把握して、そのうえ想像を超える質問を返してくれる同い年の女の子が、まさかこの世にいようとは。さすがは高等学校といふべきでしょうか。

どうやら少しばかり甘く見ていたようです、今の今まで。

「そうですね」

一呼吸置いて時間を稼ぎつつ、私は答えをはじき出すために頭をフル回転させます。

「当時サマール沖に展開していたのは、米第七艦隊の旧式戦艦群と護衛部隊ですね。米軍側は他に第三艦隊として一三隻の正規空母と六隻の新式戦艦を参加させていましたが、これらは小沢治三郎中将の指揮する日本第三艦隊に誘引され、この時点での戦闘加入は不可能でした。ですから、おそらくは第一遊撃部隊とレイテ湾突入を阻止しようとする第七艦隊との間で、海戦史上最後の戦艦同士の戦闘が発生する、と予測されます」

「レイテ湾突入の可能性についてはどう？」
「すかさず、かがみさんが追求してきます。」

久しぶりに味わうこの高揚感。

「どうでしょうか。第七艦隊の弾薬については前夜の第二、第三遊撃部隊との戦闘でほぼ射耗していたという説、一会戦分くらいは残

つっていた説など諸説ありますし。一方の第一遊撃部隊の将兵達も連日の戦闘で疲れ切っていたはずなので、こればかりは実際に戦ってみないとわからないですね」

「じゃあ仮に突入できた、としてだけど。確かあの時、ダグラス・マッカーサー陸軍大将は

第七艦隊の旗艦、軽巡洋艦『ナツシユビル』に乗って、全般指揮を執っていたはずよね」

「ええ。すでに上陸していたという説もありますが、乗っていた可能性も否定はできません」

それはまるで打てば響くかのようで。

「もし戦闘に巻き込まれてしまった、としたら」

「命を落とすことになっていたかもしれないね、確かに」

彼女の意図をはかりかねながらも、私はそう答えました。

「そこでマッカーサーが戦死してしまったら、その後歴史はどう転換したのかな。ぜひ、みゆきの意見を聞いてみたいんだけど」

「そうですね。歴史にIFは無いと言いますが、なかなか興味深いテーマですね、それは」

「でしょ。きつとみゆきなら話に乗ってくれると思った」

ニコニコと素敵な笑顔を浮かべながら、かがみさんは自分の鞆を開けると、そこから何かを取り出しました。

「そんなみゆきには、ぜひこの本をお勧めするわ」

「これは？」

「ぶっちゃけ架空戦記モノの小説なんだけどね。ただし、そのあたりに転がってる妖しげなヤツとは一味違うのよ」

「架空戦記、ですか」

あの、せつかくのところ申し訳ないのですが、その手のトンデモ本はちょっと……。

「まあまあ、そんな微妙な顔しないで。しばらく貸しておくからさ。」

だまされたと思って読んでみて。お願い」

「……わかりました。かがみさんがそこまでおっしゃるのでしたら、喜んで」

白いビニール袋に包まれたその本を、私はまるで百カラットのダイヤモンドでも取り扱うようなつもりで、かがみさんから受け取りました。

「ねえ、かがみいー。いい加減に歴史の事から話題移さない？ なんかすっごい疎外感があるんですけど」

それまで完璧に背景と化していた泉さんが、ようやく会話に加わってきました。

「ひひひ。たまにはアニメの話についていけない一般人の気分を思い知れ」

「あおう、私も何のことだかさっぱりわかんないんだけど」

冷や汗を流しながら、つかささんも必死にも訴えています。

「ああもう、しょうがないわね」

そんなやり取りを小耳にはさみながら、私はさきほどかがみさんにお借りした、白いビニール袋の中身を確認してみました。そこには少々くたびれた感のある、紺色の文庫本が三冊入っています。周りの誰にも気づかれないうちに、私はそのうちの二冊をそっと手に取りました。いかにもそれらしい表紙に、表題が漢字で二文字。

「『征途』、ですか」

仕方がありませんね。帰りの電車で読んでみることにしましょう。

何かが、始まるうとしていました。

第3話・もうひとつの日本史

全国一億三千万人の架空戦記ファンの皆様、本当に申し訳ありません。

正直、このジャンルを軽く見ていたことを、深く懺悔いたします。

今までの私の認識では、トンデモ兵器で日本が勝利してしまうとか、後世世界がどうしたとか、そのようなかなり妖しげなエンターテイメント小説、というモノでした。でも今回、かがみさんからお借りした本は、そうした私の思い込みを根底からひっくり返すものだったのです。うーん、これは少しばかり認識を改めないといけませんね。

かがみさんが私に貸してくれた珠玉の三冊。それは、ひよっとしたらありえたかも知れない、もうひとつの日本の物語なのでした。

第二次世界大戦の末期

史実とは異なるレイテ沖海戦の日本海軍の局所的勝利により、米軍は甚大な損害を受けてしまいます。これにより日本侵攻作戦のスケジュールは大幅に狂い、結果的にソ連の北海道上陸という事態を招きます。このため以後の日本は、分断国家としての歴史を歩むことになってしまふのです。また同時にそれは、ある一組の兄弟の仲を引き裂くことにもなってしまうました。この物語は兄弟の数奇な運命を軸に、展開していくこととなります。

さて、この世界の日本の戦後史は、ある意味とてもドラマチックです。朝鮮戦争と呼応して発生する北海道戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、そして統一戦争。これらを通じて日本の国際的な立場は大

幅に向上していきます。

ただし、少なからぬ犠牲と引き換えに。

そして兄弟たちもまた、これらの戦いに否応なしに巻き込まれていくのです。『見栄と諧謔』という武器を片手に、黙々と死地におもむく人たちの姿はあまりにも魅力的で、それ故にとても哀しい。独特の乾いた文体も、それを一層際立たせているような気がします。

主人公の兄弟たちはもちろんですが、彼らと共に歴史に翻弄されていく脇役達も、それぞれに存在感を發揮しています。

たとえば、戦車将校の福田定一。

現実世界では作家『司馬遼太郎』として高名な方ですが、この物語では北海道戦争の開戦と共に応召し、軍人として半生を過ごすこととなります。常に『何のための戦いだ。何のための勝利だ』と自問しつつ、しかしその優秀な頭脳と決断力で、しばしば劣勢をはね返し自軍を勝利に導いていきます。ですがその活躍ゆえに反戦派からは目の敵にされ、あまりに政治的な存在になってしまったために、味方であるはずの自衛隊からも疎まれ、ついには放逐されてしまうという悲劇的結末を迎えます。

そんな救われないエピソードが、この物語には満載されているのです。

もちろん、首を傾げたくなくなるような部分がないわけではありませんが。たとえば、あまりにも強すぎる『大和』級戦艦とか。まあ基本がエンターテイメント小説ということを考えれば、仕方がないことかもしれませんね。

ただ、もうひとりの主人公とでも呼ぶべき戦艦「大和」または護衛艦「やまと」は、そのような欠点を割り引いても十分な魅力にあふれていています。第二次世界大戦を生き残り、時代遅れの存在と蔑まれ、ついにはイージス艦として生まれ変わり、幾多の戦争を戦い抜いていくその姿には感動すら覚えます。もし彼女に意識が宿ったとしたら、はたしてどのような感想を述べることでしょうか。

ぜひとも聞いてみたい、と思うのです。

なぜなら私は、この物語の「やまと」と、共に戦う人たちにすっかり魅せられてしまったから。

たとえば目をつぶると、こんな光景が浮かんできますね。

そこは北海道稚内沖を驀進する海上保安庁海上警備隊・超甲型警備艦「やまと」の昼戦艦橋で。

眼前にはソ連の義勇艦隊と『北日本』の赤衛艦隊が展開しています。

それに目がけて「やまと」の十八インチ主砲が六年ぶりに火を噴く。

巨大な炎と轟音、そして黒煙が上甲板で炸裂し、それから一瞬遅れて押し寄せてきた濃密な硝煙の匂いに襲われ、思わずむせ返りそうになります。そしてそのあまりにも壮絶な光景に何事かを感じてしまい、つい私は大声で叫んでしまうのです。

「四六サンチ！」

それを聞いた艦橋の人々が私に笑みを向けてきます。でもそれは決して冷笑とかの類ではなく、たとえて言えば、大事な玩具を友達に見せびらかした子どものような笑い。

そして艦長の猪口敏平一等海上保安正が、私のほうへ振り返るとこうおっしゃるのです。

「我らが倶楽部へようこそ、高良みゆき」

なんて。

そんな風に考えただけで、なんだか胸がドキドキします。

あ、でもひよっとすると、少しばかりヘンな娘ですね、私。いえいえ、少しどころではないですね。

かなり、かなり恥ずかしいかも。

あまり外では妄想しないように、気をつけないければいけませんね……。

それはとても甘やかな、煉獄からの召還状。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4978f/>

我らが倶楽部へようこそ

2010年10月9日05時22分発行